

イラクのキリスト教徒、留まることのない暴力的迫害のため将来を悲観

ローマ、2011年6月14日 (ZENIT.org)

先月の31日、モスルで起こった四児の父親である正統教会の信者アラカン・ヤコブの暗殺事件(拉致されて数日後、ひどい姿の死体が町の広場に放棄された)のあと、イラクの信者の間に将来に対する悲観的な見方が広がっている。

イラク北部のアルビールの大司教 Bashar Warda (カルデア典礼) は、迫害に苦しむキリスト教徒への援助に従事するカトリックの国際的慈善団体「苦しむ教会への援助」A I N のインタビューに答えて以上のような印象を語った。

司教によれば、その暗殺事件のあと、信者たちの中には自分たちの先祖の国には「未来がない」と打ちひしがれたものも出てきた。しかしだからといって隣国の政治的不安定さを考えると、そこに移住するのも危険だと思っている。

アラカン・ヤコブの殺害は、イラクで一番最近に起こったキリスト教徒迫害の惨事である。彼は、二度の拉致未遂のあと、三度目で犯人たちに拉致され、人質となった。その三週間前には、29歳の若者 Ashur Yakobo Issa が拉致されていた。彼も、家族が10万ドルの身代金を払えなかったので、殺害された。

ワルダ司教の話では、2002年からすでに570人のキリスト教徒が宗教的あるいは政治的理由で殺害されている。2006年から2010年の間には、17人のイラク人司祭、2人の司教が拉致され、誘拐犯人たちから殴られ、拷問を受けた。そのうち一人の司教、4人の司祭、3人の副助祭が殺されている。

多くの信者は海外に移住を望んでいるも、イラクの隣国、シリアとトルコも不安定で危機的な状況にある。大司教は「トルコも状態はよいとは言えない。現在シリアで起こっていることを考えれば、そこに脱出できても、よい展望はほとんど見えてこない」と言う。

サダム・フセインの体制が崩壊した2003年から宗教的暴力が増長し、それ以来トルコもシリアも多くのキリスト教徒の難民を受け入れてきた。

大司教はヤコブの殺害が信者の間に悲観的な見方を深めたことを認めるが、落胆することには抵抗する。「希望のメッセージはいつもそこにあります。生き続けるべきです」

大司教は、何度も同胞の苦しみを全世界に伝えてきた。最近では英国とアイルランドに赴き、迫害についてのA I Nの白書を紹介した。その際に、統計資料をもとに、イラクでは1980年代には140万人いたキリスト信者は15万に減少したことを示した。

A I Nはワルダ大司教を応援し、イラクのキリスト教徒を援助している。イラク、ヨルダンとトルコにおけるキリスト教徒の難民に緊急援助物資を送り、イラク北部の難民には食料を、貧しく迫害を受けている司祭、修道者、神学生には資金を送っている。

